

吉備の国、旭川・倉敷川紀行

総務部 三瓶 美和子
岐阜分室 辰巳 昌子

外気が肌に冷たくなり、街路樹に深く秋の色がにじみ出した頃、私達は今回の目的地、岡山県に降り立った。この地は古くに「吉備の国」と呼ばれ、大和の国、出雲の国と並んで日本の古代史において重要な役割を担っていた。初日は、その中央部に位置する「西の大川」旭川の周辺を散策することにした。

旭川は幹川流路延長145キロメートル、流域平均降水量約1590ミリ、岡山市内を貫流し児島湾に注ぐ一級河川である。岡山城を囲むような形で大きく蛇行する姿は、安土桃山時代に城の防護のためになされた治水工事によるものである。しかしこれは後に、幾度となく繰り返される洪水の原因の一つともなった。



(岡山城と旭川)

さて、岡山県といわれてまず思い浮かんだのが「後楽園」と、いうことで旭川、岡山城を眺めつつ、川を隔てて対の中州にある日本三大名園のひとつ、後楽園を訪ねた。ここはその面積が13ヘクタールにもおよび、広大な芝生や美しい池の水面、築山、植え込みなどを歩きながら楽しめる、江戸時代を代表する回遊式庭園である。念入りに人の手が入られた庭内からは、ほとんど現代的構築物が見えないため、実はそこが市内のど真ん中であることを、うっかりすると忘れてしまいそうだった。



(後楽園庭内より)

翌日は岡山駅から電車で約20分の倉敷市へ足を伸ばした。その日は朝から生憎の曇り空。現地に着く頃には小雨もパラついてきたが、「倉敷は雨の降る日が最高」という言葉を思い出し、今日のところは日頃の行いがよい(?) ということで気を取り直して、倉敷河畔にある美観地区へ向かった。

掘割、柳並木、川面に映る白壁と貼り瓦。河岸に江戸・明治時代の面影を残す古い町並みで有名な美観地区を持つこの河畔は、江戸時代に幕府直轄の天領地であった倉敷の物資の集散地として栄えた。倉敷川にかかる中橋と高砂橋の間には、かつて川港だった名残がみられ、入船時にはそこで荷役作業を行っていたことがうかがえた。また、備中米の運び出しなど、商業用水路としても重要な役割を果たしてきたようだ。

この町並み、白壁土蔵を倉敷の主演とすると、倉敷川はその脇役として良い味を出していると思った。

またこの地域は美術館、考古館、民芸館などが建ち並ぶ文化の香り高い一面も見せている。この日は大原美術館を見学した。大原孫三郎氏により創設されたこの美術館は、ギリシャ神殿風の建物の中にエル・グレコ作「受胎告知」をはじめ、モネの「睡蓮」、マチスの「マチス嬢の肖像」など世界画壇の巨匠たちの名画が数多く収められており、それらの迫力に引きつけられて時間がたつのも忘れてしまった。



(川港の名残り)



(白壁土蔵と倉敷川畔)

限られた時間の中で駆け足での取材だったが、倉敷の文化や、風土にふれ実に、実り多いものだった。また何かの折にこれらと出会うことができるようお願いつつ、私達は吉備の国を後にした。